（ 続紙 １ ）

京都大学	博士（　人間・環境学　）	氏名	島貫香代子
論文題目	The Locus of Identity: Death, Genealogy, and History in William Faulkner's Works		

（論文内容の要旨）

本論文は、アメリカ人小説家ウィリアム・フォークナー(1897-1962)の小説の中で、クエンティン・コンプソンが登場・関係する作品を対象として分析している。

第１章では*The Sound and the Fury*が扱われ、クエンティンの自殺について、自殺の場所チャールズ川との関わりを重視する。自殺の場所の推定、川の蛇行の状態が南部に関するクエンティンの鬱屈や根無し草的な感情と密接に関わっている点が論じられる。クエンティンの入水自殺が父親の虚無的な価値観や態度への反抗の行為であり、彼は自殺という行為によってアイデンティティを回復しようとした、と結論づける。

第２章では、*The Sound and the Fury*第４部において死者であるクエンティンの存在がいかに強烈であるかが検証される。第４部の語り手は、第１部の一人称の語り手ベンジーを客観的に語るという利点を活かす一方で、第２部の語り手クエンティンと第３部の語り手ジェイソンへの愛着を示している。第４部の中でも特にディルジーの物語は、この章の語り手がクエンティンの価値観を内面化し、クエンティンの存在がフォークナーの後の作品においても存続し続けることを予兆する、と論じる。第４部はまた、全知の語り手に身を重ねた作者が、依然としてクエンティンを愛しており、別の語り手の心の中に自らのアイデンティティを回復することさえためらわない、と論じる。

第３章では、“That Evening Sun”の語り手にクエンティンが選ばれた理由が考察される。この短編のクエンティンは２４歳に設定されており、*The Sound and the Fury*のクエンティンが２０歳頃に自殺をしているという点との齟齬が、多くの研究者を悩ませてきた。本論文では、黒人の洗濯婦ナンシーがクエンティンと同じ運命に遭ったことを暗示するためにフォークナーが意図的にクエンティンの年齢を２４歳とした、と主張する。

“That Evening Sun”においてナンシーの声や感情、彼女のアイデンティティはほとんど無視されているとはいえ、クエンティンはついには南部におけるナンシーの困難な立場を理解し、自分の立場を彼女の立場に重ねる、とする。

第４章では“A Justice”が扱われる。この短編ではサム・ファーザーズとチョクトー族との関係が論じられることが多いが、本章では黒人奴隷の母を持つサム・ファーザーズの黒人性を再検証する。クエンティンは南部の“one-drop-rule”に根ざす人種差別を理解するようになるが、それによればサムも差別される例外ではない。最終章におけるクエンティンの退行的な言葉は、彼が死に至るまで南部の重みを直視できないことを示している。本論第１章の場合と同じように、クエンティンの死は南部の白人男性としての彼のアイデンティティを再確認する契機となる、とする。

第５章から第７章までは*Absalom, Absalom!* を扱う。第５章ではチャールズ・ボンに焦点を当てるが、性的、人種的、空間的曖昧性をボンと共有するブードゥー教のトリックスターであるレグバについても考察し、ボンのトリックスターとしての役割は母親譲りのものであると推測する。母親の道具であることと父親から捨てられた息子であることとの対照は、混血の生まれであることとも相まって、南部における謎めいた不運な人物というボンの強烈なイメージを形成している、とする。

第６章では、ハーバード大学の寮の一室でクエンティンとサトペンの物語を再構築するシュリーブ・マッキャノンについて考察する。サトペンの物語における欠けた輪を補い、それに統一性を与えるという重要な役割を果たしているにもかかわらず、シュリー

ブは超然とした外国人にすぎないと解されてきた。しかしカナダの歴史というコンテクストにおいてシュリーブの役割を再考する時、彼は単なるアウトサイダー以上の存在であることが分かる。サトペンの物語を再構築していく中で、シュリーブは南部への理解を深め、自身のカナダ人としてのアイデンティティを再確認するのである。

第７章では、クエンティンが自殺を決意したのが、サトペンの屋敷でサトペンの息子のヘンリーに会った時であることを論じる。性格や人生経験が似ているため、クエンティンは本能的に自分の未来の姿を死につつあるヘンリーに重ね、サトペンの物語や南部の遺産をシュリーブへの遺言として残そうと思う。クエンティンは自分の後継者として、奴隷制に根を持つ南部の歴史的精神的重圧を免れ、それでいてサトペンの物語に親近感を持ち同化できる人物を選んだのである。一族の家系の最後にシュリーブが登場したことは、シュリーブがその最後の継承者としてサトペンの物語の一部となったことを示している、とする。

第８章は、フォークナーが後年付した“Appendix”におけるキャディについての記述の前半部に着目し、クエンティンに対する彼女の感情や、彼女の後の人生に与えたクエンティンの死の影響を再考する。彼の死がキャディにもたらした喪失感は、娘（叔父の名にちなんでクエンティンと名付けられた）を愛する誘因の一つとなる。娘のクエンティンを思う時、死んだ兄クエンティンの思い出がキャディの中で強まる。“Appendix”は、家系がそれぞれの人物のアイデンティティや運命に与える影響を示している、とする。

ミシシッピ人としてのアイデンティティを探求しながら、状況に耐え、自らが生きる世界に対処する人々を描くことによって、フォークナーは独自の宇宙を創造した。クエンティンの土地についての感覚を分析することによって、彼のアイデンティティが特定の場所への執着に基づいた問題に深く根ざしていることが明らかになる。これがおそらくフォークナーが、死んだクエンティンを以後の作品で再び登場させようと決断した主な理由の一つと考えられる。また、クエンティンだけがアイデンティティの問題に苦悩した人物ではなく、他の人物たちもまたアイデンティティの危機に直面し、それを克服しようと苦闘していることが指摘される。

本論各章の分析により明らかとなるのは、アイデンティティの追求は必ずしも幸福な結末に至るわけではないことであり、その端的な例がクエンティンの自殺である。しかし、たとえ虚構の謎めいたヨクナパトゥーファを舞台にしているとはいえ、究極的にフォークナーの作品を「リアル」なものにしているのは、登場人物に対する作家のしばしば厳しすぎると言ってよいほどの姿勢であることが解明された。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

アメリカ人作家ウィリアム・フォークナーのいくつかの作品では、フォークナーが創造した南部の架空の村ヨクナパトゥーファにおいてクエンティン・コンプソンが重要な位置を占めている。クエンティンを作家の半自伝的人物とみなし、他の人物に比べてその重要性を強調する批評家も少なくない。実際 *The Sound and the Fury*、“That Evening Sun”、“A Justice”、*Absalom, Absalom!*、“Lion”、“Appendix”において、クエンティン・コンプソンは中心的な役割を果たしている。しかし、これらの作品をコンプソンについての一連の物語と見るか、それぞれ別個のものと見るかを巡って、批評家たちの間で論争が続いてきた。中でも、*The Sound and the Fury*において自殺したクエンティンを、フォークナーが後の作品で主人公や語り手として再び登場させていることについて、様々な解釈がなされてきた。本論文では、これらの作品を一連のものと見る立場を取り、死、家系、歴史という観点から、「自己とはいかなる存在か」というクエンティンのアイデンティティの問題について従来の解釈に新たな光を当てている。

本論文ではまず、クエンティンが生まれ故郷の南部ミシシッピ州ではなく、北部マサチューセッツ州のチャールズ川において自殺を決意したことを重視し、彼の根無し草としての意識や、死によってアイデンティティの危機を克服しようとした努力について考察する。クエンティンが最初に登場した作品*The Sound and the Fury*において自殺することは、後の作品群で彼が再び登場する点を考えれば、特別の重要性を持っていると考える必要がある。*Absalom, Absalom!* においては、クエンティンの死が自殺であるとは明確に描かれない。しかし彼が１９１０年にマサチューセッツ州で死んだことは、*The Sound and the Fury*での記述に符合し、彼の身体的な健康状態を考えると、自然死とは考えにくい。クエンティンのアイデンティティは、彼の一族が関わる南部に対する彼の複雑な感情と、死への強迫観念を通して考察されねばならない。以上のように、本論文第１章は、彼の自殺がアイデンティティの形成と深く関わることを論じている。

クエンティンのアイデンティティは、南北戦争以前から以後にわたる南部の歴史の推移に重なるコンプソン家の家系とも密接な関わりをもつ。この点に関して、本論文は、フロイトのエディプス・コンプレックスの概念を援用したJohn T. Irwinの研究を支持する立場をとる。キリスト教というコンテクストからクエンティンの自殺を論じつつ、Irwinは家系に関係する二つの主たる要素「父、母、息子のエディプス的三角形と祖父、父、息子あるいは父、息子、孫の父系三世代」に着目する。これらの要素は、家系を通してクエンティンの自殺とアイデンティティを決定している点で注目に値する。本論第７章と第８章は、コンプソン家の人々が自分たち一族の家系を強く意識して、その影響を逃れられないという状態について考察する。コンプソン家の人々は、一族のルーツを意識するようになる時、そのような伝統の継承を拒絶するかあるいは関わるかの、いずれかを選ぶ。本論文第４章、第５章、第７章、第８章は、コンプソン家三世代、父子、兄妹に関する家系的な問題を扱い、それぞれの人物のアイデンティティにおける家系の持つ重要性を考察している。

生まれ故郷に対する執着により、クエンティンは自分のアイデンティティを再確認する。彼はヨクナパトーファ村の物語を誠実に語る最初の人物であると同時に語り手でもある。語り手でありかつ聞き手であるというクエンティンの役割は、ヨクナパトゥーファ村の形成と発展に不可欠なものである。批評家John W. Huntが指摘するように、「クエンティンの特別な任務は、自らの時代の意味の喪失に苦しむ、若く傷つき

やすい貴族の感受性をもって、ヨクナパトゥーファ村について倫理的・歴史的に語ることである」。ミシシッピ州出身のハーバード大学生であるという自覚は、決して充たされることのない歪んだ現実感を彼にもたらす。クエンティンが深刻なアイデンティティの危機を迎え、それに対処しようとしていることは疑い得ない。家系の問題とともに歴史的な問題が、彼の生存の根本的な理由を投げかけるからである。歴史は社会の中の人間の立場と無関係ではなく、登場人物は不安定で複雑な自分のアイデンティティを再考せざるを得なくなることを、本論文のほとんどすべての章が明らかにしている。

ただし、本論文が扱っている人物はクエンティンだけではなく、アイデンティティの問題に重要な情報をもたらす他の人物も、考察の対象となっている。本論文第１章と第７章を除くすべての章が、クエンティン以外の人物と語り手を扱い、クエンティンを扱うだけでは十分には解明し得ないアイデンティティの問題の補完的な側面を明らかにしている。「取るに足らぬどんな人物でも、本の中に登場すれば自分の伝記を語る。表現の仕方は無数にあるが、その人物は自分自身について語っているのだ」と、フォークナー自身も述べている。言い換えれば、他の人たちの物語を語り直すという行為は、語る人物自身のアイデンティティを探求することにもつながり、そのアイデンティティは、語り手の場所、一族の関係、そして歴史についての感覚によって強い影響を受けている、と本論は結論づけている。

以上のように、本論文は、難解なフォークナーの作品群においてこれまで論争されてきたいくつかの問題を、クエンティン・コンプソンを考察の軸とすることによって解明した優れた研究である。もっとも、本論文においてはフォークナー作品以外への言及が少ないことも事実である。本論文が扱う分野の研究がアメリカ文学全般に対する幅広い視野から論じられたものとなるためには、今後にさらなる課題が残る。

とはいえ、本論文は、没後半世紀を経ても依然として評価が衰えず論争され続けている作家フォークナーの研究に、斬新な視点から新たな解釈を加えたものであり、その意味では共生人間学専攻、思想文化論講座の理念に十分適う研究である。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成２５年８月１日、論文内容と要約、およびそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第１４条第２項に該当するものと判断し、公表に際しては、出版刊行上の支障がなくなるまでの間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日：　　年　　月　　日以降